

馬場孤蝶

一葉の日記



# 一葉の日記



## 上

樋口一葉の日記を公刊するといふことがいよいよ世間へ発表された。それに就て実否を問い合わせられる人があるので、読売の紙上を借りて、一葉日記の話<sup>す</sup>を為る。

日記の原稿は、幸田露伴君の校閲を経て、博文館に廻わり、私の所で始の方百頁位は校了になっている。樋口家と博文館との協定は、二冊から成る一葉全集を出そう

といふのだ。日記へ持って行って、従来刊行の書簡文範を加え、それを前篇とし、従来の一葉全集に、未刊の小説断片及び随筆を加えて、それを後篇とすることになつてゐる。即ち、一葉の遺稿といふべきものは、日記と、小説断片と、随筆とのこの三つなのだが、小説断片は一葉の文学生活の初期に属するものばかりなので、唯史的価値があればあるといふ迄に過ぎ無いもので、呼び物は無論日記だ。随筆もそう大した者では無い。

日記は、明治二十四年四月即ち一葉二十歳の時から始まつて、二十九年即ち歿したる年の五六月頃までで終わ

っているが、その間に抜けている処はタントは無い。さて、そういう風に連続しては居るが、部分々々で、表題が付いている。初めの方は『若葉かげ』中は『蓬生日記』『若くさ』『道しばの露』『しのぶ草』等末が『水の上日記』若くは、『水の上』といったようになっていた。だ。全体の枚数は今正確には云え無いが、十行二十字詰の原稿紙に直おすと大凡六百枚位にはなるう乎。尤も、原文は大抵半紙を四ツ折にした小さい帳面に書いてあるのだ。樋口家の人の話に依ると、現存の分は日記の全部では無く、一葉生存時に、自分で鼻紙にしたり、ほぐし

て、裏へ手習をしたりして、散逸せしめて了った部分が少しはあるというのだ。

それで、この日記をその書かれた場所で区分すれば、

『若葉かげ』等は本郷菊坂町の大溝おおどぶの向うの真砂町の崖

下の家で書かれ、下谷区龍泉寺町即ち京一の非常門近くの家で書かれた分には何か別に名が付て居り、最後の『水の上日記』は一葉終焉の地——本郷区丸山福山町四番地の家で書かれたのだ。その福山町の家は前と後とに池があつたので、表題をそう付けたのであろう。

間接に聞いた所では、一葉はこの日記を文章の稽古の



積りで書いたということだ。初めの方は擬古文の体であるが、終りに近づくほど、だんだん文体が砕けて、終は一葉の後期の小説にあるような文体になっている。

私の気のせえか知らぬが、どうも初めから文章は旨いように思われる。元より思想は平凡なり、筆付きも覚束なげではあるが、その初心らしい所に一種の体があり、発達すべき才分をほのめかしている所が少なからずあるように思われるのだ。日記は四月十一日に吉田かとり子という人の角田川すみだの家へ師匠の中島歌子及び同門の人々と一緒に花見に行く所から筆を起してあるのだが、当時

のような世のなかでの二十歳の婦人の書いたものとしては、決して軽んずることの出来ぬ筆致なのだ。吉田氏の家の楼上から大学のボオトレースを見るくだりに「みの子の君うらやましげに見居たまひて、かち給はゞさもこそ嬉しからめとの給はすに、おのれもまけたまはばさもこそくやしからめと打うめきて笑はれにき」と書いてあるのだが、負けたら口惜しかろうというように直ぐ考える所が、一葉の気質を好く表して居て面白いと思う。墨堤の夕景を次のように叙して居る。「折しも日かげは西にかたぶきて、夕風少しひやゝかなるに、咲あまりたる花

の三つ二つ散みだるゝは小蝶などのまふやうにみえてをかし。酔しれたる人の若き君たちにざれ言などいひかくるぞらうがはしくもいとにくし。やうく日の暮れ行ゆくまゝにそれらの人はかげもとゞめずなりにければ、今は心安しとて花の木かげたちめぐり、おのがじゝざれかはずほどに、いつしか名残なく暮れはてゝ、川の面をみ渡せば水上はしろき衣を引たるやうに霞みて向ひの岸の火かげばかりかすかに見ゆるも哀れなり」二十の婦人の書いたものとしては、確に才筆と云えようでは無いか。

中島門下の秀才田辺龍子君は当時既に小説作家として

の文名が高かった。一葉は生活難から文を売ろうと考えたのであろう、四月の十五日には、知人野々宮嬢の紹介で、半井桃水君に逢いに行つて居る。日記には、斯う書いてある。

「君が住み給ふは海近き芝のわたり南佐久間町といへるなりけり。……愛宕下の通りにて何とやらんいへる寄席のうらを行て突当りの左り手がそれなり。……出きませしは妹の君なり。……座敷のうちへともなは伴れいるに、兄はまだ帰り侍らず今暫く待給ひねと聞え給ひぬ。……門の外に車のとまるおとのするは帰り給ひしなり

けり。やがて服など常のにあらため給ひて出<sup>いで</sup>おはしたり。初見の挨拶などねんごろにし給ふ。おのれまだかゝることならはねば耳ほてり唇かはきていふべき言もおぼえず、のぶべき詞<sup>ことば</sup>もなくて、ひたぶるに礼をなすのみなりき。よそめいか<sup>ばかり</sup>斗をこなりけんと思ふもはづかし。君はとしの頃<sup>みそぢ</sup>卅年にやおはすらん、姿形など取立てしるし置かんもいと無礼なれど、我が思ふ所のまゝをかくになん。色いと良く面おだやかに少し笑み給へるさま誠に三才の童子もなつくべくこそ覚ゆれ。丈は世の人にすぐれて高く、肉豊にこえ給へばまこと

に見上る様になん。……」

その日は、半井氏から小説を書く心得などを聞いて、帰ったが、それから数日経って、四月廿五日に半井氏は、話し度いことがあるから、神田表神保町の俵屋という下宿屋まで来て呉れという紙を一葉に送った。翌二十六日の日記に依ると、その俵屋というのは、こうしゅうかん 洽集館という勧工場——今の南明倶楽部の南手の所にあつた家だというのだ。其所のありさまは、次のように書いてある。

「少ちやかなる間ま幾開あかしらず数多おほかり、うしのいませしは二階下の座しきにて、二間に住居給ふかとみゆる

に、箆笥などの並べあるは手廻りたる事よと心には思ひて座につくほど、君は手紙したゝめ居給へりき。暫し免させ給へとてかき終り給ふ。今日は洋装にて有りたり。……小説のことに就きてもねんごろに聞えしらせ給ひて、此次はかゝるも書きみ給へ、おのれかねてより書んかかの心組み有りしかども暇いとまを得ずして日頃過ぎぬとて、かくくしてかくせばをかしからんなど物語り給ふ。それより先に今日はまづ君に聞え置度事おきたきありてとの給ふ。そは何事にかと問ひ参らすれば、いとや、余の事にもあらず、余やいまだ老果たる男子をのこに

もあらず、君はた妙齡の女子なるを交際の工合甚だ都合よろしからずと、君真まことに迷惑氣にの給ふ。さもこそあれとかねて思へばおもて火の様に成りておのが手の置場も無く唯恥かはしき面おほはれたり。猶の給はく、よりて吾れ一法を案ぜり、そは外ならず、余は君を目して我が旧來の親友同輩の青年と見なして万の談合をも為すべければ、君は又余を見るに青年の男子なりとせで、同じ友がきの女子と見給ひて隔てなく思ふ事の給ひねと聞え給ひて打笑みたり。」

その時半井氏は一葉の家の貧困であるのに同情して、



いろいろ親切に話をした。半井氏自身の来歴をも語った。一葉は、その日の記を「師がの給ふ所をきけば、吾が家の貧しきは未だ貧しとすべきにあらず、君の経来り給ひけんこそ中々にまさり給へれとぞ覚ゆる」という言葉で終わって居る。

半井氏対一葉の交際に就ては、世間で種々の臆測があるようだから、以下、日記のなかから、半井氏に関する分だけを大凡拾って見よう。

## 中

五月の八日には、一葉は桃水氏の宅で、小宮山即真居士に紹介された。同十五日には、半井氏の転居した麴町平河町の宅を訪い、廿七日には、小説の原稿を携さえて再び半井氏を訪うて居る。六月三日と同十七日に又半井氏を訪うた。日記は六月の二十三日から七月の十七日までと八月の十一日から九月の十五日までとが欠けている。九月二十六日の所に、斯う書いてある。「国子（一葉の妹）……半井うしのことなどをも聞て来ぬ。いでや

猶記者は記者也、朱にまじはるになど色赤うならせ給はざらん、品行のふの字なること信用のなし難きことも姉君が覚す様には侍らずとよとてまめだちて聞えしらさるゝに胸つぶれぬ。我為には良師にしてかつ信友しんいうと君もこうらいの給へり、我が一家の秘事をも打明て頼み参らせいたす後來扶けにならんなどの約も有しをそも偽りなりけんかしらず、誰たが誠をかとて打もなげかれぬ」

十月十八日の所には、一葉を半井氏に紹介した野々宮菊子が来て「一昨日おとつひより半井君ぎみのもとに遊びてよべ帰りぬ、夏子ぬしはいかゞし給ひしやなどいいたう打案じ

ての給へりし、参らせ給へよ」と云った。一葉は之に答へて「みにもかねてより参り寄らまほしく思ひながら、猶なんさはる事ありて、まかでぬを常に心ぐるしうてのみなんある」と云った。同二十四日の所には「半井孝子かうこ（桃水氏の令妹）ぬしが嫁入り給ふいはひもの少しもて行方ゆくかたよろしからめとてなり。さは明日早朝にと心がまへす。久しう訪とひ奉らざりしうちにさまぐあやしきもの語りども多かるを半井君のそをおのれにつまんとて苦心し給ふなど聞きにも少しほゝゑまれぬ」と書いてある。二十五日には祝物を持って行ったまままで上らずに帰った。

三十日の所には、

「半井君を訪ふ。……種々込み入りたる話しもあれば、此頃もとめし隠れ家にとの給ふ。伴はれて一丁斗手ばかり前なるとあるうら屋に参る。座敷の間数四つ斗あり云々」

とあつて半井氏の話は、

「……君がかく打絶うちたえて訪はせ給はぬなん我身に何事か有たる様にさかかしらする人や侍りけん、身はしら雪の清きをもてうたがはれ奉るなんいと心ぐるしう、かつは君が中頃より打絶させ給ひしを小宮山などあやしが

りて それがし 某 まがごと に猶曲事ある様になん思はるゝこれもつら  
し、依ていかで君に以前のごと訪はせ給はらん事をと  
ていといひにくかりしかども野々宮ぬしに委しく語り  
まつれるにこそ、……兄弟中の醜聞より御母君などあ  
やふがりてかく引止め給ふにや、其心配なう参らせ給  
はゞ嬉しからんなどの給ふ」  
と書いて、その次に「おのれはさる心にもあらざりしか  
ど笹原はしるみ心なめりかし」と、一葉の評語が加えて  
ある。十一月二十四日に一葉は、桃水氏を隠れ家に訪う  
た。二十五年の一月七日に、一葉は半井氏の所へ年始に

行つたが、本宅には貸し家札が貼つてあつて、半井氏に用のある人は、其近辺の小田という家で問い合わせると、いう貼紙があつた。で小田へ行つて聞くと、唯だ地方へ旅行したとばかりで要領を得無かつた。何うも例の隠れ家には無いかと、それへ行つて音なつたが、留守のようであつた。水口の戸の開いて居る所から、家のうちへ入つて見たが、誰も居無かつたので、土産物を板の間に置いて歸つた。同十一日には、旅行では無くつて隠れ家に居るのだという、半井氏の端書が一葉の所へとどいた。二月の三日の所に、「半井うしへはがきを出す、いだ明日参

らんとてなり、しばらくにしてうしよりもはがき来る、  
明日拝顔し度し来駕給はるまじきやとの文躰ぶんていなり、こは  
おのれが出したるに先立てさし出したまへるなるべし、  
かく迄も心合ふことのあやしきよと一笑す」とある。翌  
四日には、雪を冒して半井氏を訪うたが、桃水氏は、ま  
だ眠っていた。一葉は次の間で、十二時少し過ぎから一時  
頃まで待っていた。半井氏は起きて、雑誌『武蔵野』の  
発行さるることを話して、一葉の作を求めた。半井氏手  
ずからしるることを作って一葉に饗した。四時頃車で送られ  
て九段へと堀端を通った。「雪の日といふ小説編まばや



の腹稿なる」と書いてある。

二月十五日には一葉『武蔵野』の原稿——『闇桜』——を半井氏のもとに持って行つた。三月七日半井氏を訪うて『武蔵野』同人の意気壮なことを聞き、『闇桜』の好評なるよしを聞いた。十八日半井氏初めて一葉を訪うて、西片町へ転居の通知をした。二十一日一葉半井氏を訪うて、自分は実際小説家になれる見込があるだろうか、直言して呉れと、頼んでいる。半井氏は一葉の生計上に困難なことがあらば応分の助力はするから、何処までも小説を書いて見ろというような意味で答えている。

二十三日半井氏を訪うと、『武蔵野』の表題を書いて呉れと頼まれてそれを書いた。二十四日一葉半井氏を訪うて、生活上の補助を依頼したが、半井氏は月末までには必ずと快諾した。廿六日半井氏から、宜いことがあるから来いという使が来たので、翌廿七日半井氏を訪うと、一葉の別著の小説——『別れ霜』——を改進黨新聞に載せることにしたからという話であった。再訂の必要があると云って、一葉は原稿を持ち帰って、其後の数日努力した。廿九日の所には「むさし野広告出たり何と無く極り悪るし」と書いてあり二三行後に「一日分文章す（新聞原稿）」

半井氏のもとへ持参せしは十時なりし、今夜も国子同道」とある。四月六日の記事のあとに、歌が四五首書いてある。「みちのくのなき名とりがはくるしきは人ぞきせたるぬれ衣にして」「散ぬればいろなきものを桜花こひとは何のすがたなるらん」「ゆく水のうきなも何か木の葉舟ながるゝまゝにまかせてぞみん」外二首だ。四月の日記の巻の首に「かまへて人にみすべきものならねど、立かへり我むかしを思ふにあやふくも又ものぐるほしきこといと多なる、あやしうも人みなば狂人の所為とやいふらむ」とある。これは後から書いたものかも知れ無い。四

月十八日の所に「午前のうち片町の大人うしがり行く、此の日頃悩やみ給ふ所おはす上に何事にやあらむ立腹の氣にてはかぐ敷しくは物語も賜はらぬなむ心ぐるしければ、いでや今日こそは御心取らんとて出たつ」とある。廿一日の所には「午後より大人のもとを訪ふ、むさし野来月分趣向につきてなりけり、畑島君はたじまも参り合はされたり……、大人物の趣向の談合いとおもしろし」とある。三十日桃水氏を訪うているが、半井氏は痔を切断して病臥していた。五月一日、四日、九日、十九日、二十日半井氏を訪うている。多くは病氣見舞の為であった。廿二日

の所には「半井うしの性情人物などを聞くに、俄に交際をさへ断りたくなりぬるものから、今はた病ひにくるしみ給ふ折からといひ、いづこへぞかく斯ることといひもて行かるべき、快方を待てと心に思ふ。……午後より又半井君病氣を訪ふ、朝鮮より友人両三名来たりしとかにて此辺乱雑也けり、おのれ行きたる故にや人々は早かへりぬ。其のこと由ゆ謂ゑなきにもあらず」とある。

## 下

六月七日一葉は島田にゆつて半井氏を訪ふた。「人々めづらしがる。是よりは常にかくておはせよかし、いとよく似合ひ給ふをなどいはれて中々に恥づかし」とあつて、半井氏の言葉を斯う書いてある。「実は君が小説のことよ、さまざまに案じもしつるが、到底絵入の新聞などには向き難くや侍らん、さるつてをやうくに見付けて尾崎紅葉に君を引合せんとす、かれに依りて読売などにも筆とられなばとく多かるべし……されど、それも是

も我は日かげの身立たちいで出て何事かなし得べき、委細畑島にいとよくたのみてそれが知人より頼み込こませしなり、此二日三日のほどに君一度紅葉に逢ひては身給はずや……との給ふ、何事のいなかあるべき、いと辱かたじけなしといふ」とある。一葉は其足で直ぐ、中島家へ行つた。中島家の老人の祭典で、人が十四五人居たが、一葉の信友伊東夏子が一葉を別室へ呼んで、家の名が惜しくば半井氏と絶交せよと勧告した。十四日の所が面白い。

「我不ふと凶師の君の前にいざり出ぬ。……聞き参らせ度きことぐもあり……といふに、師の君やをら座を定め

て何事の問ぞ、今宵聞かんとの給ふ、半井うしのこと  
 はかねて師にも聞かせまつりて、……我心に憚かる処  
 いさゝかもあらず、先まづかくくしかぐに人の申すな  
 む……或は半井のことに依りてにや侍らん、もとより  
 ……我より願ひての交際にもあらず、家の為身のすぎ  
 わひの為取る筆の力にとこそたのめ、外に何のことも  
 あるならず、さるをか様ように人ごとなどのしげく成るな  
 んいと心苦し、哀あはれ師の君の御考案はいかにぞや、  
 ……御教へ給はらまほしといふ、師の君不審いぶかしげ気に我を  
 まもりて、さて儲は半井といふ人とそもじいまだ行末の約



束など契りたるにては無きやとの給ふ。こは何事ぞ行  
 末の約はさて置おきて我聊こゝろかもさる心あるならず、師の  
 君までまさなき事の給ふ哉と口惜しきまゝに打恨め  
 ば、夫それは実かく、真実約束も何もあらぬかと問ひ極きは  
 め給ふも悲しく、我七年のとし月傍近くありて、愚直  
 の心と堅固の性は知らせ給ふ筈なるを、うたがひ給ふ  
 ぞ恨めしく、人目なくば声立てゝも泣かまほし、師の  
 君さでの給ふ、実はその半井といふ人君のことを世に  
 公けに妻也といひふらすよしさる人より我も聞ぬ、  
 ……もし全く其事なきならば交際せぬ方かたよろし宜かるべし

との給ふに、我一度はあきれもしつ、一度は驚きもしつ、……ひたすら彼の人にくゝつらく……猶よく聞き参らせば、田辺君、田中君なども此事を折々にかたりて……才のきは際なども高しともなき人なるに、夏子ぬしが行末よいと気の毒なるものなれなど云ひ合へりしなりとか、是に口ほどけて師のもとに召使ふはしためなどのいふこと聞けば、此取沙汰聞しらぬものは此あたりになしといふほどうき名立たるなりとか、浅ましとも浅まし、明日はとく行て半井へ断りの手段てだてに及ぶべしなど、師君にも語る。臥床ふしどに入れどなどは寝られ

ん」

とあるのだ。十五日に一葉は半井氏を訪うた。

「我師われの君より教えられつる様にことつくるひてももの語りす、師の君のもとに家のうち取まかなふ人なく我行き居らではもの毎に不都合也とて……今しばらくは手伝ひ居らんとす、さすれば……紅葉君のことも何も先へ寄りの事ならずば……其甲斐あるまじく……この事申さんとて今日はいさゝかのひまもとめて参りつるなり」

と云つて、小説修行中止のむねを半井氏に告げた。廿二

日まで、中島家に泊って居たが廿二日に家に帰って、半井氏から借りて居た本を返しかたがた半井氏を訪うて一葉は実際の事情を打ち明した。半井氏の言葉は、

「必竟は我罪かも知れず、先頃野々宮ぬしに物がたり  
の時いはねばよかりしものを我思ふことつゝみて兼ね  
て、お前様のことしきりにたゝえつ、……よき婿君むこぎみの  
お世話したし、我れ何ともして我家を出ることあたふ  
身ならばお嫌やかしらずしひても貰ひていたゞき度たきも  
のよなど我実われじつをいひたり、夫や是れや取りあつめて世  
にさまぐにいひふらすなるべし」

と書いてある。記事の終りは、

「此人の心かねてより知らぬにもあらねばか様のこと引出しつる憎くさ限りなけれど又世にさまぐくに云ひふらしたる友の心もいかにぞや……あれと是れとを比べて見るに、其の偽りに曲まげてなけれど、猶目の前に心は引かれて、此人のいふことぐくに哀に悲しく涙さへこぼれぬ、我ながら心よはしや、かゝるほどに国子迎ひに来る、家にも聊ちやうかは疑ひなどするにやあらむ。

打ちつれて帰る」

となっている。廿六日

「国子の物がたりに聞けば、廿三日に半井ぬし宅前まで参られし由、折ふし来客ありしかば憚かりてにや立寄りもせで行かれたるとなり」

とある。二十三日には一葉まだ中島家に居たのだ。七月十二日

「中元として半井ぬしを訪ふ、君今日何方いづかたへか転居されんとする也けり、もの語ることも無くて帰る」

とある。それから、時々半井氏を対象にしたような述懐の歌だの感想が書いてあるのみで、半井氏に逢った記事は無い。十一月十三日には、其月の二十日に『うもれ

木』が田辺龍子君の紹介で雑誌『都の花』に出る筈になつていたので、半井氏に一応挨拶に行かなければ悪るだろうという母の意見に、一葉は喜んで、半井氏の出していた葉茶屋——三崎町——を訪うた。

「六畳敷ばかりの処に机おきてゆたかに大人<sup>うし</sup>は寄りかかり居たまへり、ふとあふげばものいはず打笑み給へる嬉しなどはよのつねたゞ胸のみをどりぬ」

「商ひのいと忙はしくして大人のしばしも落付給ふいとまなく立働らきおはすさま何とはなくかなし、ありし病ひの後はいといたうやせてさしも見あぐるやうな

りし人の細々となりぬるに、出入りにつけてものはか  
なきみづしめ様のものようにさへ客といへばかしら下げ給  
ふことのいたましさ、これをなりはひとすれば身には  
つらしとも覺さざめるを見る目はいと侘し」

「人無きを見てつと御身近くさし寄りつゝ、何は置て  
御目に懸る事のいとはるかなるが口惜うこそ、何事も  
浮世に申合す人無きやうにて心細さ堪へ難しと云へば  
……もしこゝに申すことありと思さば、此うら道のい  
と淋しく人目といふものふつにあらねば此処より立寄  
り給はんに誰かは見とがめ申べきとさゝやき給ふ、い



でや其忍びたるたぐひを厭へばこそ……と云はまほし  
 けれど申さず来りぬ、何も何も残したるやうにて別れ  
 ぬるなり」

などとある。十二月七日の所には半井氏から、小説『胡沙こさ  
 吹く風』の序歌を求めた。直にかえし認めて、「歌は一  
 首、よからねども林正元（小説の主人公）をよめるのな  
 りけり、かゝる折ふしの音づれいと嬉し」とある。八日  
 「龍田君来給へり……ゆかりある人と思へば何方いずこか憎く  
 かるべき、帰らんといふに、母君菓子をつゝみて兄君に  
 みやげにと出す、龍田君より我がよろこばしさ上もなか

りき」とある。三十一日「三崎町に半井君の店先を眺めぬ、年わかき女の美しく髪などもかざりて下女にては有るまじき振舞は大方大人の細君なるべしと国子のかたる」とある。二十六年二月十一日「国子と共に九段に遊ぶ、夜くらくして風あらく三崎町あたりは家々戸をおろしていと淋し、半井ぬしのもとには龍田君斗ばかりみえしと国子の語る」とあつて「みるめなきうらみはおきてよる波のたゞこゝよりぞたちかへらまし」という歌がある。

二月二十三日の夜半井氏は『胡沙吹く風』を贈る為に一葉を訪ふた。

「半井にこそ候へ夜に入りて無礼なれど、いふに、其人なりと聞くまゝに胸はたゞ大波のうつらん様になりて思ひかけず唯夢とのみあきれにけり……何事も靄の中にさまよふ様なり、明ぬれど暮ぬれど嬉しきにも悲しきにも露わすれたるひま無く夢うつゝ身をはなれぬ人の……せめては文にても見まほしきをなど人にいはれぬ物をおもへば幾度かどに出で立ちつくし、あらぬ郵便にたばかられて心恥かしかりしも一度二度ならず、いふべき事も覚え、問ふべき事も忘れて面ほてりのみいと堪へがたし。……ともし火のかげよりかす

かに面を仰げば優然としてうち笑みたる面ざし、まこと林正元今こゝに出現したらん様なり、我が小説『暁月夜』いつのほどにか見給ひけん、こまやかに物がた  
 らる、猶折ふし目とゞめ給ふらん嬉しさいとかなし、  
 ……さらばと立つを止め参らせんも中々にて送り出る  
 ほどかなしともかなし、嬉しとも憂しともいはんかた  
 ぞなき、夢うつゝとも得こそ分ねわかばいはまほしき事も  
 何もたゞひたすらにもものも覚えず」  
 とあるのだ。此辺には大分文学○が○入っているようだ。『胡  
 沙吹く風』に就ては、

「この小説うき世の捨て物にて……もよし、我がため  
生粹の友これを措おきて外に何かはあらん、孤燈かげほそ  
く暗雨まどを打つの夜人しらぬおもひをこまやかに語  
りてはゞかる所なく、なげきもし悦びもせんはうつせ  
みの世にもとめて得がたき所ぞかし、此夜此書をひも  
といて暁の鐘ひとり聞けり、引とめん袖ならなくに暁  
の別れかなしく物をこそ思へ、昼はしばし別れんにこ  
そ」

と書いてある。三月十二日

「わが家は細道一つ隔て上通りの商人あきうどどもの勝手とむ

かひ合ひ居たり……国子耳とどむれば、かの大人があたりのごとにぞ似たる、主人あるじめきたる人二人三人あればいづれが主人それなるや分らねど、色しろくたけ高やかなる人のものいひ少しあがりたるは大方この人主なるべし、奥方や、何や知らず面ざしなどさしても美事ならぬがものを買ふとていとたかしなど小言云ひつるに、さなまがくしく商人なしかりそとて、其のまゝの価ひに買とりくれたるはわかりし人なりし、家は三崎町の外れにて店がまへ立派なる葉茶屋なりと云ひ居たるよし、かの大人に違ひはあらしなど国子かたるに、

忘れぬものを又さらに思ひ出<sup>いで</sup>ていと堪がたし。くれ竹のよも君しらじ吹く風のそよぐにつけてさわぐ心は「それからその直ぐ後に、

「とある夕べ鐘の音を聞きて、まちぬべきものともしらぬ中空になど夕ぐれのかねの淋しき」とある。十五日の末に「入る日の方を眺むれば、かの大人のあたりそこと忍ばれて、うら山し夕ぐれ響く鐘の音の至らぬ方もあらじとおもへば」とある。

今原稿が手許に無いから確には云え無いが、一葉と半井氏との交通は二十六年三月以後は殆ど絶えてしまった

と云つて宜いようであつたと思う。唯、二十九年になつて、半井氏が斎藤緑雨が一葉を訪いだしたと聞いて、「緑雨という男は油断のならぬ奴だから」という警戒を与えに一葉の所へ行つたことが、日記に出て居るのみだ。一葉は半井氏の意外にふけたのに驚いているように書いてあつたと思う。

世に伝わつて居る一葉対半井氏の関係は、日記に表われた所では、上来記する通りだ。一葉の方にも随分誤解があるから、一葉が書いたそのままの言語態度で実際半井氏があられたことだか、俄には断ぜられ無い。唯だ



此事件は日記のなかの一番艶のある部分のように思われるので、ついながながと書いて了った。

一葉とのみ云って何の敬称をも付ぬのは、文字の節約に外ならぬ。他意は無い。



日本文学電子図書館

---

一葉の日記

著 者：馬場孤蝶

制作者：宮澤一郎

底 本：「明治文壇の人々」、  
ウェッジ文庫版

2009年10月26日 第1刷発行

日本文学電子図書館